

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (著書) 最新薬理学	共著	2012年1月	廣川書店(株)	薬学部学生向けに編集された、薬理学の教科書。(656頁) (赤池昭紀、石井邦雄 編集) (赤池昭紀、石井邦雄、石原熊寿 他12名) 中枢神経薬理のうち、中枢の構造と機能・ニューロトランスミッター、抗精神病薬、抗うつ薬・気分安定薬・精神刺激薬について薬理的に解説した。 担当部分:第4章-1中枢の構造と機能・ニューロトランスミッター、第4章-2抗精神病薬、第4章-3抗うつ薬・気分安定薬、精神刺激薬。(pp.135-165、担当部分は単独で執筆)
2 (著書) 図解薬理学	共著	2015年10月	(株)南山堂	みてわかる薬学シリーズの1冊として、薬理学の内容について図を多用して解説した教科書。(874頁) (鍋島俊隆、井上和秀 編集) (石川智久、石原熊寿 他30名) 第2章精神・神経系の薬理のうち⑧抗てんかん薬の執筆を担当した。PP.204-217、担当部分は単独で執筆)
3 (学術論文) Serotonergic modulation of neuronal activity in the nucleus accumbens following repeated methamphetamine administration in rats.	共著	2013年10月	Journal of Pharmacological Sciences, Vol 123, No.2, pp.140-146, 日本薬理学会	精神依存誘発作用をもつメタンフェタミンを連続投与したときにおこる脳内神経活動変化を精神機能に密接に関係する側坐核について検討した論文。連続投与終了後5日目にセロトニンによる神経活動抑制作用が減弱するが、それには興奮性に働く受容体サブタイプの機能亢進が関与し、受容体以降は最初のアデニル酸シクラーゼ機能亢進があることも明らかにした。(7頁) (石原熊寿、高橋尚倫、河本直樹、吉川知里、福元周平、井手総一郎、木村丈司、小澤光一郎) 担当部分:共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
4 (学術論文) Inhibitory effects of levetiracetam on the high-voltage-activated L-type Ca ²⁺ channels in hippocampal CA3 neurons of spontaneously epileptic rat (SER)	共著	2013年1月	Brain Research Bulletin, Vol.90, No.1, pp.142-148 Elsevier	新しい抗てんかん薬の一つであるレベチラセタムは自然発症てんかんラットの海馬CA3ニューロンで観られるカルシウムチャネルの異常電流を抑制する事を示し、抗てんかん作用にこの抑制が関与する可能性示した論文。(7頁) (H.-D. Yan, 石原熊寿, 関貴弘, 花谷亮典, 栗栖薫, 有田和徳, 芹川忠夫, 笹征史) 担当部分:共同研究につき本人担当分抽出不可能。
5 (学術論文) Reduced emotional and corticosterone responses to stress in μ -opioid receptor knockout mice.	共著	2010年1月	Neuropharmacology Vol.58, No.1 pp.241-247 Elsevier	オピオイド μ 受容体ノックアウトマウスにおけるストレス応答を野生型マウスと比較検討した。ノックアウトマウスではストレスによる情動反応が減弱していることから、生体内では μ 受容体はストレスによる情動反応を促進的に調節している可能性について示した論文。(7頁) (井手聡一郎, 曾良一郎, 池田和隆, 南雅文, G.R.Uhl, 石原熊寿) 担当部分:共同研究につき本人担当分抽出不可能。